

ニュータウンの魅力再発見に向けた 若者の「集まりの場」の条件

研究代表者：板倉大河

共同研究者：繁下龍平・小野寺真由・工藤遥奈
寺尾南美・堀 数馬・森岡真生

第1章 研究の背景と目的

第2章 研究をめぐる状況

第3章 事例をもとにした若者の「集まりの場」とは

第4章 まちの若者の「集まりの場」の実態・意識：アンケート調査

第5章 現地調査

第6章 結論：ニュータウンの魅力発見に向けた若者の「集まりの場」の条件とは

第1章 研究の背景と目的

現在、日本では、人口減少が進行しており、それに東京への一極集中が伴って、地方では過疎化が進み、街の衰退が見られる。高度経済成長期に開発された各地のニュータウンでも若者の都市進出と、初期に入居した住民が一斉に高齢化したことで、住民の減少と少子高齢化が顕著になっている。例えば、泉北ニュータウン（1965年開発開始・大阪府）では65歳以上人口比率が2020年時点で36.2%となっている^(文1)。これはニュータウンで育った若者が結婚や就職などを契機にニュータウン外に転出することが理由として挙げられる。高齢化の進展は、地域コミュニティの活力の低下、商業・医療施設の経営の困難など様々な面に悪影響を与え、若者の流入による人口構成の改善が必要である^(文2)と考えられる。

そのためには、ニュータウンをより若者に魅力を感じてもらえる場所にしていかなければならない。では、若者が求める街の魅力とは何か。資料調査によると一般的な若者のライフスタイルの特徴は、インターネットに大きく影響され^(文3)、情報交換などへの活用により、人とのつながりを重視するという価値観を持っているとされている^(文4)。

それに対し、平城・相楽ニュータウン居住者を対象としたアンケート調査結果によると^(文5)、「近隣の人やコミュニティとの関わり」の満足度が他の住環境などの項目に比べ低く、また「人と関われる場、くつろぎを感じる場」は、「特になし」と答える人が多かった。このことから、住民が交流したり、くつろいだりする場が十分でないことが推測できた。そこから、住民たちが「集まりの場」と感じる「場」を増やすことができれば、街の魅力が高まり、それが若者の流入増加にもつながるのではないかと考えた。

そこで、本研究では、若者が求める街の魅力としての「集まりの場」とは何かを問い、その条件を明らかにしていく。また今回主要な研究対象である平城・相楽ニュータウンにおける若者の「集まりの場」についてもその実態を明らかにしていく。なお、本研究の中では若者とは、中高生から30代を中心とした世代を対象とし、「集まりの場」とは、気分転換や人との関わりなどを目的として、個人が能動的にそこに集まりたいと思う空間と定義づける。

第2章 研究をめぐる状況

本章では、文献や資料をもとに若者にとっての「集まりの場」の必要性やその実態について把握する。

2-1 文献からみる若者の「集まりの場」の必要性や条件

若者が魅力と感じるような「集まりの場」の条件として重要視されるものは以下の3点であると言われている。ひとつは、居場所は制度化・施設化されてはならないということである。つまり居場所には自然発生的の要素が必要である。2つ目は、人間関係が固定されないことである。これは例えば、店員と常連という関係ができてしまうことをいう。コミュニティを生まないために多様な人の自由な参加ができる場所であることが望ましい。3つ目は自分の興味のあるものと異なる世界に触れられることである^(文6)。また、無料で自由に過ごすことができることが重視されると言われている。このように、若者の「集まりの場」とは、一般的には誰でも入りやすい場ではないかと考えられる。

2-2 統計調査から見るニュータウンの現状と「集まりの場」の推定

平城・相楽ニュータウンの住民を対象とした、「平城・相楽ニュータウンのまちづくり・まち育てに向けたアンケート調査」^(文5)の年齢別集計をもとに、若者の「集まりの場」の特徴を分析する。

(1) ニュータウンにおける人との関わりの場

近隣のコミュニティについての満足度(図2-1)、並びに「人と関われる場、くつろぎの場

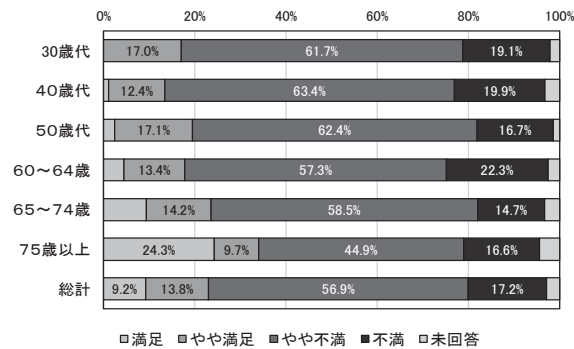


図2-1 「近隣の人やコミュニティとの関わり」の満足度

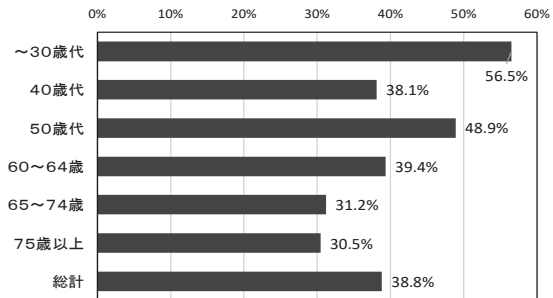


図2-2 人と関われる場、くつろぎの場「特になし」

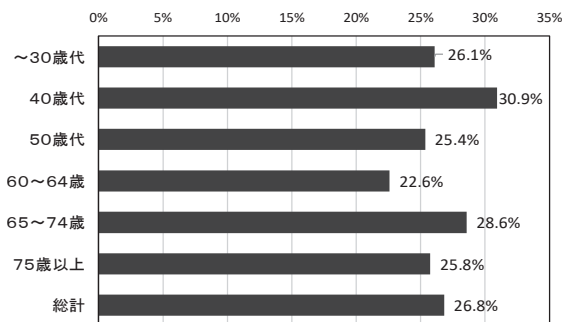


図2-3 人と関われる場等が「ショッピングモール等」

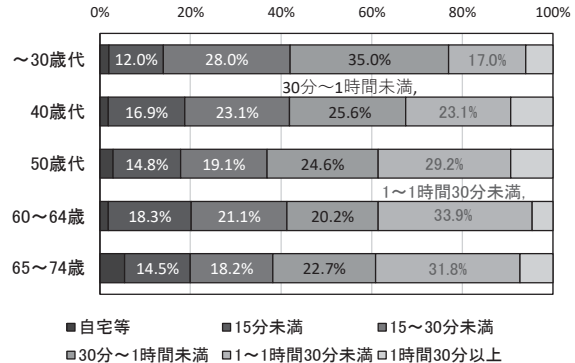


図2-4 通勤・通学時間(通勤・通学する人)

の有無」(図2-2)を年齢別にみると、若者は近隣コミュニティへの満足度が低く、かつ「人と関われる場等」も高齢者に比べ、少ない傾向がある。

また、現状としてどのような場所が人とかわかりあうことのできるコミュニティの場として機能しているのかについてみると、ショッピングモールやその他商業施設の割合は～40代や65～74歳以上で高い(図2-3)。

(2) ニュータウンに住む人の日常の行動範囲

ニュータウンに住む人の日常の行動範囲について、仕事や学校などの観点から通勤通学時間について調べたアンケート結果についてみると、大多数の人が通勤・通学に要する時間が15分以上1時間未満であり、～30歳代は1時間未満が合計8割を占める(図2-4)。

(3) まとめ

平城・相楽ニュータウン居住者を対象としたアンケート調査をもとに考察すると、今後ニュータウンにおいて「人と関われる場等」として必要とされる要素として、(Ⅰ)自宅からの移動時間が1時間未満で気軽に行くことのできる場、(Ⅱ)同世代同士が集まりやすい構造のある場、(Ⅲ)コミュニケーションを重視した場の3つがあげられるのではないかと仮定した。この「人と関われる場・くつろぎの場」を「集まりの場」として実態・考察を行う。

第3章 事例をもとにした若者の「集まりの場」とは

本章では、若者の「集まりの場」の条件を明らかにするために、若者の「集まりの場」と考えられる事例について調査を行い、それぞれの特徴の比較分析を行う。

(1) 事例調査

① 調査の概要

調査対象は「GOOD LAUNDRY PLACE (八尾市)」、「ゲストハウス&カフェ (奈良市)」、「まちのね浜甲子園 (西宮市)」、「やまわけキッチン (堺市)」、「コノミヤテラス (河内長野市)」、「BONCHI (奈良市)」、「鶴見緑地 (大阪市と守口市)」の7か所である。調査は現地視察により、2021年8月から9月にかけて実施した。

② 調査結果

7か所の事例調査の結果より、若者の「集まりの場」を構成する条件の項目は、「空間」「利用目的」「利便性」「サービスの種類」の4点があると考えられる。

- 1) 空間の特徴をみると、空間の条件は利用する人の属性によって異なるものと思われる。
- 2) 利用目的の特徴をみると、いずれの施設も利用目的が複数あるため、多目的型の施設が若者の「集まりの場」に好ましいと考えられる。
- 3) 利便性についてみると、その高さは7つの施設すべてに共通し、若者の「集まりの場」を構成する重要な条件であると考えられる。
- 4) サービスの種類についてみると、単にお店のサービスを受けるような受動的な利用を求めているだけでなく、自ら利用方法を選択できる場も求められていると考えられる。

(2) 若者の「集まりの場」の条件<仮説>

以上の第2章の文献調査・統計調査や第3章の事例調査をもとに、本研究で明らかにしたい『若者の「集まりの場」の条件』を下記のものとして仮定し、第4章、第5章でその実態や可能性を考察する。

表3-1 若者の「集まりの場」の条件とその要素(仮説)

<p>1. 空間 子供も安全・空調などの設備が整っている・緑などの自然が多い・建物の外観や中がおしゃれ・空間が広い(席数が多い)・入りやすい雰囲気がある・居心地がいい・開放感がある・リノベーションされている等</p> <p>2. 利用目的 仲間等でゆっくり会話ができる・飲食ができる・キッズスペースがある・静かに勉強や読書ができる・スポーツができる・歩いたり走ったりできる・音楽の演奏や歌唱、大声を出すことができる・ペットと触れ合うことができる・景色を眺めることができる・その他自由に過ごすことができる等</p> <p>3. 利便性 駅に近い・車で行きやすい・家から行きやすい等</p> <p>4. サービスの種類 他人に干渉されない・時間を気にせず利用できる・情報交換や会話ができる・イベントがある・無料で使える(安く使える)等</p>

第4章 まちの若者の「集まりの場」の実態・意識：アンケート調査

本章では、平城・相楽ニュータウンにおける若者の「集まりの場」の実態や若者の意識について、アンケート調査を実施し、明らかにする。

4-1 調査の概要

①目的：前章で仮定した若者の「集まりの場」の条件を実態から確認するために、平城・相楽ニュータウンの若者の「集まりの場」の実態・意識を把握する。

対象：概ね中高生から30代の「若者」。

場所：平城・相楽ニュータウン内にある近鉄高の原駅近くのイオンモール高の原前広場。

②方法：調査員による対面・聞き取りによるインタビュー形式で行った。調査員は2人1組(1人はインタビュアー、もう1人は記録係)。調査対象者は目視により年齢を推定し抽出。

時期：2021年11月27日(土) 12:00~17:00、11月29日(月) 15:00~17:00

③調査項目

- 1) 移動元
- 2) 来訪目的・頻度
- 3) 「集まりの場」の実態
- 4) 「集まりの場」の希望
- 5) 重要な利用目的・同行者
- 6) 希望するサービスの種類
- 7) 居住地・交通手段等
- 8) 調査対象者の属性

4-2 調査結果

(1) 対象者の特徴

2日間、合計78人を対象に聞き取りによるアンケート調査を行った。対象者の年齢層は、中高生~30代までが全体の約79%を占めており、主に若者を対象としている。

(2) 「集まりの場」の実態

のんびりしたい時や気分転換したい時に過ごす場所についてみると、そのような場所が「ある」という回答が全体の約67%で、対象者のうち約33%は、そのような場所が無い。そうした場所が「ある」と回答した中で具体的な場所として最も多かったのは「カフェ」で、全

体の約21%であった。次に多いのは「公園」で約17%、次に多いのは「イオン」で約11%であった。場所を選んだ理由としては、約14%が「近いから」と回答している。次に「買い物」、「子供と過ごす」、「友人と過ごす」という回答が同数で約11%であった。

(3)「集まりの場」の希望

「高の原付近でのんびりしたい時や気分転換したい時にどのような場所なら行きたいと思いますか」という集まりの場の希望に関する問いに対し、「カフェ」という回答が最も多く約25%であった。次いで多いのが「公園」約16%で、次に多いのが「屋内」約13%である。次に、その場所の良い所について、「安全・快適さ・広さ・交通アクセス・利用目的・サービスの種類」の観点から答えてもらった。安全・快適さ・広さについては、建物の外観がよい、おしゃれである、自然が多い、居心地が良い、入りやすい雰囲気などである。交通アクセスについては、家や駅からのアクセスが良いという回答が多かったが、遠い方がいい、近くなくていいという回答も約8%あり、非日常な場所、行きづらい場所の方が良いという人もいるということが分かった。利用目的としては、仲間と過ごす場合はゆっくり会話できる、1人で過ごす場合はゆっくり静かに勉強や読書ができるという回答が多かった。

表4-1 「集まりの場」の希望

(複数回答)

内容	
カフェ	17
公園	11
屋内	9
娯楽施設	7
その他	5
ショッピング	3
飲食店	3
図書館	2
屋外	2
座れるところ	1
静かな場所	1
カフェ・座れる場所がある公園	1
カフェ・カラオケ	1
屋内/ゆっくりできるところ	1
屋内/勉強できるところ	1
屋内/静かで座るところがたくさんある場所	1
屋外/静かな場所	1
計	67

サービスの種類としては、有人である、他人に干渉されない、長時間時間を気にせず利用できるなどの要素を、のんびりしたい時や気分転換したい時に行きたい場の条件として希望している人が多かった。

表4-2 そこで大事にする利用目的は何ですか？

(複数回答)

内容	
ゆっくり会話できる	15
静かに勉強や読書ができる	15
仲間と過ごす	8
1人で過ごす	7
ゆっくりできる	6
子供と過ごせる	3
キッズスペース	2
景色を眺めることができる	5
自由に過ごせる	8
飲食できる	5
その他	14
計	88

表4-3 そこのサービスの種類はどのようなものがいいですか？

(複数回答)

内容	
有人	11
無人	7
時間を気にせず利用できる	19
他人に干渉されない	18
無料で使える	10
イベント	1
能動的	2
受動的	1
その他	1
計	70

4-3 属性別調査結果

アンケート調査結果をもとに、属性別にクロス集計を見ていく。ここでの、属性は、気分転換したいときに誰と過ごすかであり、同行者の種類は「1人」「仲間と」「子どもと」「1人・仲間両方」である。

同行者別「集まりの場」の実態（訪問場所）を見ると、「仲間と」過ごす場所としては、カフェが最も多く、次にショッピング等であった。一方、「1人」は、ショッピング等が最も多く、カフェと公園は同数、「子どもと」は公園とショッピング等が同数で次にカフェであった。カフェはどの属性でも回答を得られており、多くの人にとって過ごすことで気分転換になっている場所であることがわかる。

次に、同行者別「集まりの場」の実態（場所の種類）を見ると、屋内と回答した人が全体の割合として多かったものの、「子どもと」の回答者のみ異なった。「子どもと」の回答者は、屋内よりも屋外と回答した人が多いことから、子ども連れは屋外で過ごせる場所、公園等、子どもが過ごしやすい場所を必要としていることがわかる。

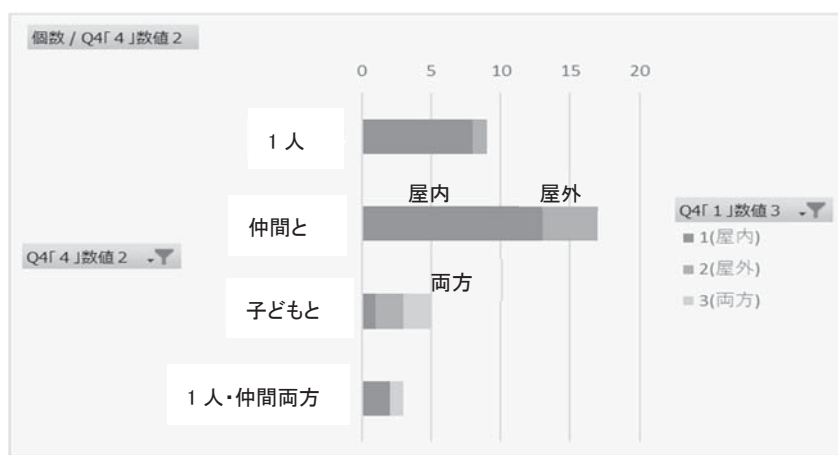


図4-1 同行者別「集まりの場」の実態（場所の種類）

4-4 分析

以上、アンケート調査結果から、第3章の仮説をもとに「集まりの場」の条件を確認すると、①空間「入りやすい・屋内」、②利用目的「ゆっくり会話ができる」、③利便性「家や駅から近い」、④サービスの種類「他人に干渉されない」との回答が多く、条件として捉えることができる。この4つの条件を見ると、大勢でにぎやかに過ごすよりも、気楽にゆったりとした時間が過ごせる場所を求めていることがわかる。この条件にあてはまる場所、そして希望の場所として、多くの回答者がカフェを挙げており、カフェが気分転換できる場所であり、また、集まりの場になるものと考えられる。

ただし、属性別の1人・仲間と子ども連れの人では、回答の傾向が異なるものが多かった。ここから、子ども連れの人とその他の1人、もしくは仲間と過ごしたいという人では「集まりの場」に求める条件が異なるものと思われる。具体的には、希望の場所として、子ども連れの回答者はその他の回答者よりも、公園や屋外を挙げる人が多かった。

このようなことから、「集まりの場」を考える上では、属性別実態と希望の関係からさらに深め、属性別にどのような場所が必要なのか考えていくべきなのではないだろうか。

第5章 現地調査

5-1 調査の概要

(1) 目的

この章では第2章、第3章の結果をもとに平城・相楽ニュータウンでの若者の「集まりの場」となりうる場所を探し、その実態を明らかにする。

(2) 対象

現地調査の場所は、「利用目的」の条件から北部会館図書館・高の原コミュニティスポーツ会館を抽出し、また、「空間」「利便性」「サービスの種類」の条件から、びいほ(すずらん館)・るあん(すずらん館)・Goods spoon・丘の小道商店街等のカフェやコミュニティ施設を抽出した。さらに、「対象者」の条件から、子ども連れにも行きやすい池谷公園・兜谷公園・平城第四公園に選んだ。これらは、第3章で明らかになった「集まりの場」の条件候補に対応し、駅から徒歩圏内、バスで数分、もしくは駐車場が広いといった利便性の高さや、利用目的が明確で複数あることや屋内施設であれば、屋内の開放感や明るさ、落ち着くような工夫をした内装、空調設備が整っていること等の特徴を持っているからである。調査対象を下図に示す。



地図：<https://www.google.co.jp/maps/?hl=ja>

1：池谷公園	2：兜谷公園	3：平城第四公園	4：びいほ・るあん(すずらん館)	5：Goods spoon
6：丘の小道商店街	7：北部会館図書館	8：高の原コミュニティスポーツ会館		

図5-1 調査対象位置図

5-2 調査結果

ここでは現地調査対象の9ヶ所の特徴から「集まりの場」の条件について考察する。

まず、北部会館図書館・高の原コミュニティスポーツ会館についてみると、「北部会館図書館」は静かでおちついていて、読書を目的としている人が集まる。「高の原コミュニティスポーツ会館」はスポーツを目的として集まる場となっている。つぎに、びいほ(すずらん館)・るあん(すずらん館)・Goods spoon・丘の小道商店街等のカフェやコミュニティ施設

についてみると、「びいぼ」の店内は狭く落ち着いた雰囲気である。また、駅からも近く、駐車場もある。「るあん」は子供が遊ぶスペースと保護者が交流できる場がある。丘の小道商店街は小さなカフェがいくつもあり、それぞれ店内は落ち着いた雰囲気がある。さらに、「兜谷公園」は広く、閑散としている。「Goods spoon」には店内は綺麗で開放的であり、駅から近いという特徴がある。さらに、「池谷公園」には遊具はないが大きさは広い。また、公園内にはトイレや蛇口がある。駐車場があるので車で訪れることができる。「平城第4号公園」は広い土地であるという特徴があり、自然が多く、景観がすぐれている。

第6章 結論:ニュータウンの魅力発見に向けた若者の「集まりの場」の条件とは

本研究では、若者が求める街の魅力としての「集まりの場」とは何かを問い、その条件を明らかにし、また、研究対象である平城・相楽ニュータウンにおける若者の「集まりの場」についてもその実態を明らかにしていった。それらをもとに考察する。

(1)若者が求める街の魅力となる場とは

第2章の文献調査より、若者が集まる場の条件として①制度化・施設化されていない自然的発生要素のある場②多様な人が自由に参加できるような人間関係が固定されない場③自分の興味のあるものと異なる世界に触れられる場の3つが明らかになった。また第2章の既往のアンケート調査から「集まりの場」として必要とされる要素として①移動時間が短く、気軽に行くことができる場②コミュニケーションを重視した場③同世代同士が集まりやすい構造を持つ場が挙げられた。さらに第3章の事例調査では若者の「集まりの場」の条件として利便性の高さや他人からの不干渉、空調設備の完備、居心地の良い空間などが挙げられた。これらの調査より利便性の高さ、多様な人がコミュニケーションを取れる場、居心地の良い空間を持つ場を若者が求める街の魅力としての「集まりの場」の条件として想定した。

(2)平城・相楽ニュータウンにおける若者の「集まりの場」の条件

第4章、第5章では平城・相楽ニュータウンを研究対象に、若者を対象とした実態調査をもとに、若者の「集まりの場」の実態やニーズを把握するとともに、第3章で仮説として設定した若者が求める「集まりの場」の条件に該当するニュータウン内の場所の実態を現地調査で確認し、その条件を明らかにした。

その結果、第2章の文献調査で得た3つの条件とは合致していないが、平城・相楽ニュータウンにおける若者にとって魅力のある「集まりの場」の特徴として、①若者の属性によって求める「集まりの場」が違う、②他世代との交流を求めない傾向にある、③利用目的が1つしかないが挙げられた。

①については属性別1人・仲間と子供連れの人で回答結果が異なるものが多かったことからこれは条件となりうるのではないかと考える。具体的には気分転換をしたいときに過ごす場所はどこかという質問に仲間もしくは1人で過ごす人は屋内施設と答えたが子供と過ごす人は公園などの屋外施設と答える人が多かった。このように回答が異なった理由として「集まりの場」の利用目的がライフスタイルによって異なることが原因ではないかと考察した。このため、「カフェ」を挙げる若者が実態、希望共に多かったが、これは1人でも仲間でも訪れやすいためと思われる。

②についてみると、アンケート調査で他世代との交流を求めると言った回答はなく、ま

た、ニュータウンの現地調査でも世代間の交流等に該当する場所は見つからなかった。これは、文献調査で得た一般的な条件「自分の興味のあるものと異なる世界に触れられること」とは少し異なっている。その理由として既往調査でみたように、ニュータウンでは同世代のつながりや交流を重要視しているのではないかと考察した。

③についてみると、現地調査対象には利用目的が1つの場所が多かったが、アンケート調査では1つの施設で複数の目的が果たせる「蔦屋書店」のような場所を求める声もあった。このことは、多目的に利用できる「カフェ」の希望の多さや、公園を仲間との会話の場にも使いたい(ベンチの設置)といった希望につながっているものと思われる。

以上のことから、これからのニュータウンの魅力となる若者にとっての集まりの場とは、家や学校・職場とは別に、交流したり、くつろいだりする空間として、1人でも仲間でも、自分で選択できる多目的な場や、自然に交流やつながりが生まれるような複合的な場、子ども連れでも自由に使える場ではないかと考える。そのため今後は、訪れた人が自分で過ごし方を選択できる多機能型施設も必要であると思われる。

引用・参考文献

- (文1)堺市泉北ニューデザイン推進室(2021)「SENBOKU New Design (2021年5月策定)」
https://www.city.sakai.lg.jp/shisei/toshi/senbokusaisei/gaiyou/keikaku/saiseishishin/index.files/SND2021_honpen.pdf
- (文2)山本茂(2009)『ニュータウン再生—住環境マネジメントの課題と展望—』学芸出版社
- (文3)内閣府『平成27年度 青少年のインターネット利用環境実態調査』
- (文4)木村晶子(2016)「現代の若者たちの人間関係」藤女子大学・人間生活学研究23
- (文5)公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構(2021), 平城・相楽ニュータウンパワーアップビジョン検討会議,
①調査検討報告「平城+相楽100つぎの50年に向けて」
②まちづくり・まち育てに向けた アンケート調査 まとめ
- (文6)田中康裕(2019)『まちの居場所、施設ではなく。』水曜社